

会議名	第34回家畜人工授精優良技術発表全国大会
開催日時	平成18年2月16日9:00~16:30
開催場所	東京都千代田区大手町1-8-3 JAホール
主催者	日本家畜人工授精師協会
参加人数(概数)	約350名
1. 会議の概要 (500~1,000字程度または議事内容の資料添付)	<p>全国の家畜人工授精師の活動の中から選ばれた12題の優良技術発表会とそれらの中から特に優秀と選定された2題への西川賞の授与、および東北大学教授佐藤衆介氏による「家畜の福祉と繁殖性について」一牛の繁殖を考える - と題した特別講演会が開催された。</p> <p>西川賞は、鹿児島県・藤山徹氏の「視覚を重要視した授精適否と授精技術の継承」と、千葉県・林敦久氏の「発情発見方法および授精時の外部徴候と受胎率」に授与された。藤山氏は33年間の人工授精の経験から得た技術を初心者や経験の浅い人に伝える方法として、授精状況の野帳記録と膣鏡による膣内の子宮外口、充血度合、粘液、外貌の乗駕の視覚による判断が大切であると指摘された。さらに、授精適期は発情後期の注入、外陰部等の消毒、融解から注入まで3分以内、膣鏡を用いて子宮外口まで注入器を誘導した後の直腸膣法による頸管深部注入、など人工授精の基本の実行が重要であると述べられた。熟練と経験を積んでいない初心者には極めて有益な助言であるといえる。林氏は酪農家の発情発見の方法や稟告の内容と授精師が適期授精するための外部徴候の項目について実態調査した結果を報告された。酪農家が発情発見率を高めるためには、現在の発見率を確認し、発見方法の有用性を検討して授精師に説明できることが重要であり、牛の挙動のみでなく複数の発情徴候から発見するべきであること、授精師はその情報を活用し、授精時の発情徴候の観察や直腸検査所見と合わせて総合的に適期授精の時期を判断することが受胎率向上につながると結論された。</p> <p>その他の発表でも人工授精師の活躍が地域の活性化や生産者の高齢化対策に結びついていることを実感させる報告が胸を打った。長崎県の山石知治氏による「壱岐牛産地銘柄確立への取り組み」や、島根県の伊藤義夫氏による「負けるな高齢化、ET・空胎防除等の取り組み」、山形県の佐藤清喜氏による「高泌乳牛群を目指した乳用牛群の改良」はその代表例である。いずれも人工授精に加えて受精卵(胚)移植技術を活用した活躍の報告であった。</p> <p>北海道北見の園田宜紀氏は、「尿膣牛への人工授精におけるサヤカバーの効果」について報告した。この衛生的授精業務により受胎率が正常牛並みに改善される効果のあることが示された。</p> <p>特別講演では、家畜にとっての自由を考えた飼養管理の基本原則が5項目あり、心理的ストレスが性腺系ホルモン分泌を抑制すること、牛の性行動の調査成績などが紹介された。動物行動学から動物福祉を考えることの重要性を再認識させられた。</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名	特に無い。
3. その他の発表課題で関心のあったもの(課題ごとに概要を400字程度)	特に無い。
4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	特に無い。
5. 報告者	花田 章